

東京農大式土壌診断調査表記入マニュアル(簡易版)

図1のように調査対象は場内の中央には広さ0.5m×0.8m、深さ0.5m程度の試坑を作り、土壌断面調査を行う。その周り4ヶ所からは土壌診断スコップを用いて作土を採取する。

1. **土壌断面図**：土色や構造の違い、根の伸び方、礫の存在状態などをスケッチする。
2. **層界**：土色や構造などの相違により、作土層と下層土に区分する。作土層の下端に相当する深さの位置に線を引く。(明瞭に変化する場合には実線、不明瞭な場合には破線)
3. **密度**：土壌断面を手の親指で押す。

指が簡単に入る-----粗
指で押しても跡が残る程度-----中
指で押しても跡が付かない-----密

4. **構造**：スコップや移植ごてで土を掘り出す。

団粒が発達して粒々の状態-----粒状
団粒が見られずかたまり状-----塊状

5. **乾湿**：土塊を手で握りしめる。

全く湿りを感じず、土塊が崩れる-----乾
湿り気を感じ、土塊が崩れない-----普通
手が濡れるが、握りしめても指の間から水がにじみ出ない----湿
手が濡れ、指の間から水がにじみ出る-----多湿

6. **土性**(砂と粘土の混ざり具合)：湿った土を手の親指と人差し指の間に取りこすり合わせる。

ツルツルして砂をほとんど感じない-----埴土
砂のザラと粘土のツルを半々程度に感じる-----壤土
ザラザラしてほとんど粘土を感じない-----砂土

7. **粘性**：試坑を掘る際のスコップへの土のこびりつき方を調べる。

ほとんどこびりつかない-----弱
ある程度こびりつく-----中
しつこくこびりつく-----強

8. **土色**：目で見た土の色を記録する。-----黒、暗褐色、褐色、黄色、赤色など

9. **施肥量**：凡例のように圃場に施用した基肥・追肥・土壌改良資材・堆肥などの種類と10アール当たりの施用量を記入する。また、施用した肥料の成分含有量が明らかな場合には窒素(N)、リン酸(P)、カリウム(K)成分量を計算して記入する。

10. **その他の項目**：凡例を参照して記入する。

11. **土壌診断方法の詳細**：<http://tsutinokai.co.jp/soil/diagnosis/outline/>

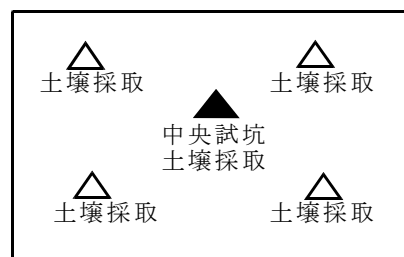


図1 土壌試料の採取位置